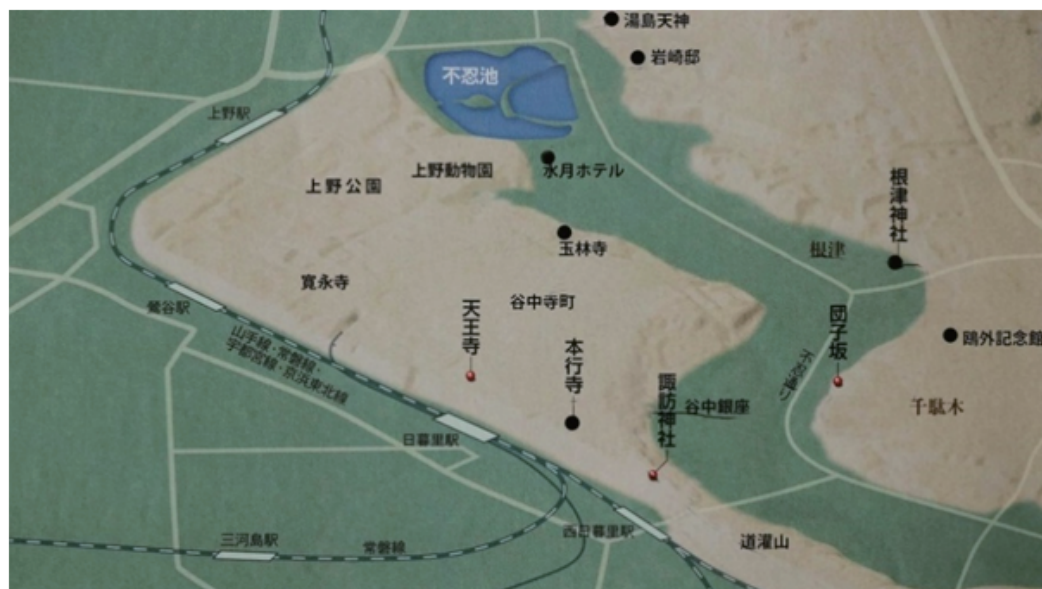


谷中寺町から根津へ

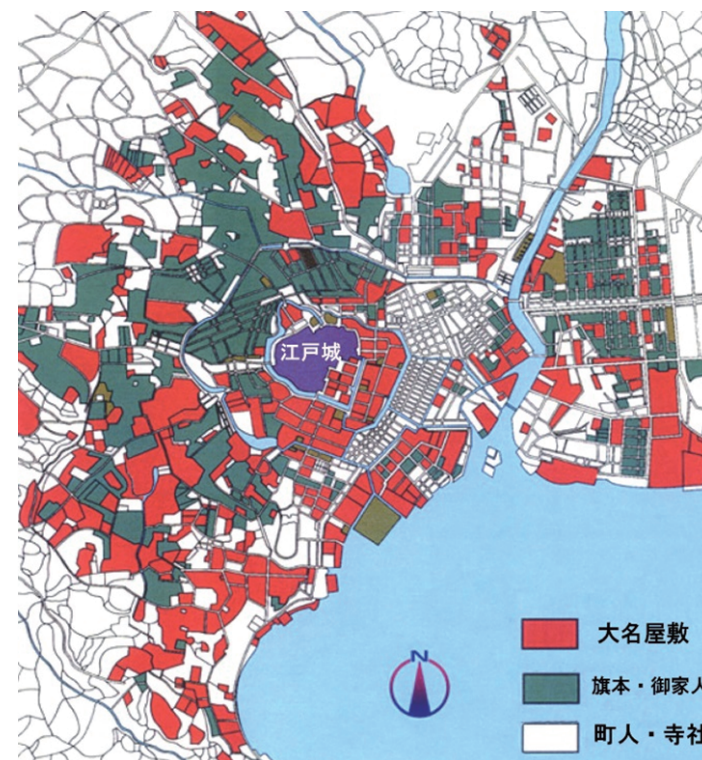
2016 年 11 月

現在、谷中銀座商店街とその周辺は休日ともなればたいへんな賑わいだが、谷中の寺町と町並みは少しずつ変わりながらも昔の風情を残し、路地には地域を愛する人たちが古家を利用し小さな店を開いて新たな魅力も付け加わっているように思える。寺町の魅力を再確認し、下町の路地裏がどんなふうに変化しているかを確認しながら谷中から根津に向かって歩く。

JR 日暮里駅 ⇒ 天王寺 ⇒ 谷中霊園 ⇒ 上野桜木あたり
⇒ 一乗寺、延壽寺日荷堂など寺町
⇒ 大名時計（勝山藩下屋敷）、三浦坂 ⇒ 根津の路地
⇒ 根津権現



谷中・根津・千駄木界限は、地形的には本郷台地と上野の台地、この2つの台地に挟まれ帯状に伸びた谷合の低地からなる。この低地には現在は不忍通りが走っているが、かつては谷田川（藍染川）が流れ、不忍池に注いでいた。この台地と谷が入り組んだ地形をもつ谷中、根津では、江戸時代にどのような住み分けがなされていたのか。江戸は、士農工商の身分社会であったことから、武家地が土地の6割以上、寺社が2割を占めていた。町人の居住地は2割にも満たなかった訳だが、その配置も高燥の地である台地は大名屋敷と徳川家の陪臣の住宅、それに寺社が占め、町人や下級武士は低地また台地の間の谷合に土地が割り当てられていた。谷中・根津の界限では、寺は多くが上野の台地に、大名屋敷や旗本屋敷は本郷台地と上野の台地、またこの台地が低地に下りる風光明媚で泉の湧く傾斜地にあり、町屋は寺町の隙間や低地のわずかな空間に帯状に伸びていた。



散策ルート



谷中について

江戸以前、谷中には鎌倉時代創建の感応寺（現・天王寺）以外、寺は数えるほどしかなかった。江戸時代に入り、上野に寛永寺が建立されたことで谷中にこの子院が数多く作られた。また慶安年間（1648～1651年）には、江戸府内再開発により神田近辺にあった寺が多く谷中に移転した。さらに明暦の大火（1657年）で江戸府内の焼失した寺院が谷中に移った。こうして、寛永寺の子院や寺院の移転で寺院の数70を超えるまでに増えた。寺が増えるにしたがって寺々に挟まれる形で門前町が開け、「寺の屋根の下に谷中の町がある」といわれた。参拝客相手の茶屋が繁盛し、天王寺参道入口あたりは「いろは茶屋」と呼ばれていた。

江戸末期の谷中界隈



赤で囲った部分が町屋。「寺の屋根の下に谷中の町がある」

谷中霊園

元は天王寺の境内の一部であったが、明治7年に都の公共墓地となる。東京の三代霊園の一つ。

高橋お伝 ニコライ（ギリシヤ正教会大主教） 横山大観 鳩山一郎
 広津和郎 渋沢栄一 朝倉文夫 牧野富太郎 沢田正二郎
 長谷川和夫 鍋木清方 徳川慶喜 などの墓や碑がある。

五重塔と天王寺

寛永寺の開祖、天海が死んだ 1644 年に五重塔が完成。

1771 年、目黒行人坂の火事で焼失したが、1791 年に近江国高島郡の棟梁八田清兵衛ら 48 人によって再建された。清兵衛は幸田露伴の小説「五重塔」の「のっそり十兵衛」のモデル。

総ケヤキ造りで高さ 34.18 メートルは関東で一番高い塔だった。

しかし、昭和 32 年 7 月 6 日高校生の心中で放火され焼失。

花崗岩の礎石だけが残る。



「上野桜木あたり」



上野桜木あたり

鬼平犯科帳といろは茶屋

鬼平犯科帳第 2 巻の『谷中いろは茶屋』では上野・谷中を受け持った忠吾が登場する。職務中に身分を隠して上がった「いろは茶屋」の遊女のお松に熱を上げて通うようになる。しかし内勤となり外出ができなくなり、お松が恋しく無断で役宅を抜け出して谷中に出かける。その途中、善光寺坂を登り一乗寺の角を曲がったところで寺から出てきた黒装束の団を目撃し、一味を捕え手柄を立てる。

く----- 細道が塀に突き当たり、左へ少し折れ曲がっている。
そこを曲がりかけて、（や・・・？）忠吾は、とっさに身を引き、
土塀の蔭から、向こうへ真直ぐにのびている道へ、わらわらと
あらわれた数箇の黒い影を注視した。
・・・・忠吾はあわてて身を返し、一乗寺の塀沿いにある榎の
木陰へかがみこんだ ----->

愛染堂に安置した愛染明王像で知られ、別名を愛染寺という。愛染明王のご利益は縁結び。「花も嵐も踏み越えて、行くが男の生きる途、泣いてくれるなほろほろ鳥よ、月の比叡を独り行く」若い人は全く知らない川口松太郎の『愛染かつら』。

自性院

愛染明王は人の煩惱である愛欲を悟りに変えてしまう明王で、煩惱と愛欲は人間の本能であってこれを攻めてはいけないとする。真言を繰り返し唱え、慕う相手から慕われ愛されるようになる、そういう素晴らしい明王、ということで縁結びとして信仰されている。

真言は、オンマカラジャ・ガゾロシュニシャ・・・・・・・・。

あるテレビ番組によると、ここで集団見合が催されるという。真言によって引かれあいカップルが沢山生まれるのだろうか？

日荷堂と日荷上人

延壽寺には足の神様、日荷上人が祀られている。本堂の横にはアスリートや中学の陸上部の生徒が記録を伸ばせるように願った絵馬や足の病の治癒を願う絵馬が沢山かかっている。また民間信仰からくる絵馬も沢山奉納されている。



大名時計博物館

旧勝山藩下屋敷内にある。荒れた屋敷内はまだなんとなく大名屋敷の趣を残している。大名時計はその一角にあり、床がみしみしきしみそうな木造の建物に、沢山の大名時計が並んでいる。大名お抱えの御時計師達の手造りで製作、ヨーロッパで使用された 24 時間の定時法の時刻と異なる不定時法を用いた。不定時法とは、夜明けから日暮れまでの昼を六等分、日暮れから夜明けまでの夜を六等分した時刻。昼と夜の長さは季節で変わるため、一時(いつとき)の長さも変わる。

旅館『澤の屋』

三浦坂からあかじ坂へ出た角が、東京・谷中の小さな日本旅館、澤の屋。かつては修学旅行生でにぎわったが、いつしか閑古鳥が鳴くようになり、やむなく外国人を受け入れ、下町の国際交流と評判になった。根津神社入口の交差点界隈の食堂、居酒屋には英語のメニューがそろっていて外国人の客人をもてなしている。焼き鳥でビールを飲んでいると英会話の勉強ができるらしい。

根津について

根津の町屋は本郷と上野の高台に挟まれた谷合に位置している。地図からわかるように、大名屋敷と旗本屋敷また寺社が周辺の高台から谷に向かって広い敷地をもち、町屋は谷の底部を流れる藍染川に沿って細く带状に伸び、根津権現の門前町を形成していた。現在、この谷合を不忍通りが走り、1971 年まで都電の 20 番が江戸川橋と上野広小路、さらに須田町までを結んでいた。



三浦坂

根津には3つの駅（根津八重垣町、宮永町、七軒町）があった。都電がバスに替わり、町名変更で駅名も根津何丁目と変わったが、二なのか三なのか今もって町と結びつかない。

江戸末期の根津界隈



赤で囲われた部分が町屋。町屋を挟んで武家屋敷がいずれも谷合にある。低地から台地に向かう一帯には大名屋敷と寺が多い。

根津神社

地元では「根津権現」と呼んでいる。社殿は1705年の創建で、江戸幕府五代将軍・徳川綱吉による普請とされ、権現造（本殿、幣殿、拝殿を構造的

に一体に造る）の傑作ともされている。つつじの名所として知られる。



根津権現の境内

志ん生の語る人情話に「心中時雨傘」というのがある。もとは円朝の作だが、円朝は根津駅から少し不忍池に寄った「根津七軒町」に住んでいたことがある。話の中身は、根津の祭の前日、露店にどっこい屋の店を出す準備をしていた女性が夜遅く家に帰るために不忍池のほとりを下谷（上野）の方に歩いているとき、穴稲荷の辺りで悪の3人に出合う。襲われるところを救ってくれた男と夫婦になるが、結末は、日暮里の諏訪神社で心中するというもの。当時の不忍池は今よりずっと広く、志ん生はこの池の様子を、「穴釣り三次」のマクラで次のように語っている。

「只今の池之端、電車が曲がって池の淵のところを走っていますが、以前は山の裾まで池が来ていたのでありまして、ずうっと見通すような池でありました。弁天様のお堂が池の真ん中になんか一つあるだけであつた。な一んにもないんですからな、すごい池でありました。暮れ方などみていますと、上野の鐘が池にしびいて、そしてハスの間から大きな鯉のしっぽがピット出たりして、鮭じゃないかと思うような大きな鯉がいたものですな。

その池が溢れて、いま電車が曲がるところを「どんどん」といって滝が落ちていました。その水が忍ヶ岡の流れに行きましてな、西町から佐竹が原の方にながれ、そこに三味線掘りがありました。……」

「江戸の三大祭」というと、神田明神、深川八幡、日枝神社の祭りだが、根津権現や浅草の三社祭が入ることもあり、根津権現の祭は今も大いに賑わう。

寺社と「風俗」

神社の参詣や寺参りは宗教にかこつけた娯楽であり、谷中の寺参りが盛んになると茶屋は風俗化した。天王寺参道入り口あたりの「いろは茶屋」は次第に岡場所の様相をも呈した。根津権現の門前町にも遊郭が生まれた。

もともと非公認の岡場所だったが、幕末に遊郭として許可を得て栄えた。近くに東京帝国大学があり風紀上問題ありということで、根津遊郭は明治 21 年に深川に近い洲崎に移転した。



昭和 30 年代初めに根津八重垣町の角にあった元遊郭とおぼしき建物

路地

この谷合は旧藍染川に沿って路地が伸びている。西日暮里の道灌山通りから、不忍池まで徒歩で 30 分かかるが、そのほとんどを路地を通して行くことができる。車が通らないため快適な散歩道である。

とくに根津には不忍通りに沿って 4 本の路地が通っている。

この路地の特徴は、植木や花を鉢で育てている家が多いこと、また木造の古い家は徐々に建て替えられているが、谷根千ブームの影響もあってかケーキや小物を扱う小さなチャレた店が近年増えていることだ。

根津の路地



根津の路地の新たな風景



藍染川

暗渠になる前、藍染川が谷の上流から不忍池に向かい根津の町屋を突っ切って流れていた。夏目漱石『三四郎』に次のようなくだりがある。根津よりわずかに上流、千駄木のまだ農家があった当たりである。

谷中と千駄木が谷で出会うと、いちばん低い所に小川が流れている。
この小川を沿うて、町を左へ切れるとすぐ野に出る。川はまっすぐに北へ
通っている。三四郎は東京へ来てから何べんもこの小川の向こう側を歩いて、
何べんこっち側を歩いたかよく覚えている。美禰子の立っている所は、
この小川が、ちょうど谷中の町を横切って根津へ抜ける石橋のそばである。

・・・・・・・・

三四郎は水の中をながめていた。水が次第に濁ってくる。
見ると川上で百姓が大根を洗っていた。美禰子の視線は遠くの向こうにある。
向こうは広い畑で、畑の先が森で森の上が空になる。
空の色がだんだん変ってくる。